



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	育児課題への対応における母親のデジタルリソース使用の意味 : 母子保健におけるデジタル社会での育児支援の再考に向けて [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	大西, 竜太
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14853号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/85225">https://hdl.handle.net/2115/85225</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	doctoral thesis
File Information	Ryuta_Onishi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



## 学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：大西 竜太

### 学位論文題名

#### 育児課題への対応における母親のデジタルリソース使用の意味 ー母子保健におけるデジタル社会での育児支援の再考に向けてー

本論の目的は、育児エンパワメントとの関連を念頭に置きながら、育児でのデジタルリソース使用の意味について解明し、デジタル社会での母子保健実践における育児支援の再考に向けた示唆を得ることである。

育児支援を行う専門領域の一つである母子保健領域では育児でのデジタルリソース使用に対する支援のあり方についてコンセンサスが得られておらず、支援の方向性に困惑を抱えている。また、一部の専門家による育児でのデジタルリソース使用に対する批判的言説が、育児の当事者である親の実情と乖離しているにも関わらず、育児でのデジタルリソース使用が“害悪”という社会通念を形成し、逆説的に親を追い込んでいる。これらの課題は、急速なデジタル社会の進展に育児でのデジタルリソース使用に関する研究が追いついていない現状と、母子保健実践がデジタル社会での育児支援において医学的知見を基軸の中心とし、「専門家による指南」という構図で展開していることから生じている。母子保健実践が抱える課題に迫るには、育児の当事者の視点からデジタルリソース使用のあり方を議論することが必要であり、そのためには育児を活動として捉え、育児活動を活性化する機能としてのエンパワメントとの関連を念頭に置き、育児でのデジタルリソース使用の意味を検討することが求められる。以上の背景を踏まえ、第一章では育児でのデジタルリソース使用の現状と先行研究の到達点を整理し、本論の課題設定を行なった。

第一章では、初めに現代における育児でのデジタルリソース使用の現状を把握し、現代における育児の日常の変化を象徴する現象として育児でのデジタルリソース使用に着目する重要性を確認した。次に、育児でのデジタルリソース使用に関する先行研究を整理し、先行研究の到達点を把握した。育児でのデジタルリソースの先行研究は、従来のテレビと育児の研究を前身とし、スマートフォンが普及して以降に開始されて間もない段階である。現在の先行研究は、母親が育児においてデジタルリソースの使用に至る実情やデジタルリソース使用によって母親の育児に何が生じるのかについて説得的な情報を提供しておらず、育児でのデジタルリソースのあり方について当事者の視点を組みこんだ議論ができていないことを確認した。以上を踏まえ、本論の目的を達成するための基本的課題として、3歳児を持つ母親を対象に、育児課題の対応においてデジタルリソースを使用することの母親にとっての意味を明らかにすることを設定した。基本的課題の達成に向け、育児を活動として捉え、母親と日常的な人々（夫、家族、友人や育児仲間）との重層的なつながりの中で生じるデジタルリソース使用に着目した分析枠組みを作成した。この枠組みは、諸主体による営みである育児活動を母親の視座から捉えた構図を示している。母親

の視座から育児活動を捉えることで、育児課題に内在する矛盾を理解しやすくなり、より本質的な次元で育児でのデジタルリソース使用の意味の探求が可能となることが期待される。この枠組みをもとに第二章および第三章にて基本的課題の達成に向けた調査および分析を行った。

第二章では、統計調査により、母親の育児課題への対応におけるデジタルリソース使用の実態および関連要因について、育児の日常の人々（夫、家族、友人と育児仲間）への援助要請との相互作用を考慮して明らかにした。その際、育児課題は子どもの統制に伴う課題（以下、統制課題）に限定した。その結果、母親が統制課題への対応において最も頼りにした相手は夫であり、デジタルリソースの使用の比重は最も低いことが示された。また、育児の日常における人々への援助要請は、高い母親役割達成感と関連したが、デジタルリソースの使用は関連が認められなかった。それどころか家族への援助要請が少ない中でデジタルリソースを使用する母親は、母親役割達成感が低いことが示された。母親が統制課題への対応のためにデジタルリソースを使用する背景要因は、「子どもの数が1人」「高い孤独感」「強いネット依存傾向」「友人からのサポートの少なさ」であった。母親のデジタルリソースの使用は、統制課題への対応において良好な成果に結びつきにくいことが示され、育児での日常的な人とのつながりの重要性が確認された。

第三章では、第二章の統制課題への対応に限局した議論を拡張し、全般的な育児課題への対応について検討した。インタビュー調査をもとに、母親が育児課題への対応においてデジタルリソースを使用する様相について、育児の日常における人とのつながりの様相と合わせて詳細を記述し、母親にとっての育児でのデジタルリソース使用の意味を検討した。母親のナラティブから、育児でのデジタルリソースの位置付けに関する4つの類型（デジタル無縁型、デジタル補完型、デジタル窮迫型、デジタル依拠型）を抽出した。

デジタル無縁型の文脈に置かれた母親は、豊富な人的リソースを活用して育児課題に対応しており、基本的にデジタルリソースを使用していなかった。デジタル補完型の文脈に置かれた母親は、豊富な人的リソースを活用すると同時に、人的リソースを補完する形でデジタルリソースを育児課題への対応において重要な位置付けとしていた。デジタル窮迫型の文脈に置かれた母親は、母親規範の内面化を背景に夫からのサポートを選択的に減退し、それにより課題対応に必要なリソースが枯渇することで、差し迫ってデジタルリソースを使用していた。デジタル依拠型の文脈に置かれた母親は、低い自己肯定感と人的リソースの枯渇を背景に、デジタルリソースを育児課題への対応の拠り所として位置付けていた。4類型の関係を検討したところ、デジタル無縁型、デジタル補完型、デジタル窮迫型、デジタル依拠型の順に、育児への行き詰まりの程度が低く、人的リソースと内的リソースが充実していた。

デジタルリソースは情動的サポート、情緒的サポート、評価的サポート、手段的サポートの4側面から、育児課題への対応において母親をバックアップする役割を有していた。デジタルリソースは、母親が育児課題を解決する上での必要な知識や情報を提供し、ライトな他者との連帯感や共感体験を得るオンライン空間を形成し、育児に対する承認や肯定を母親が得ることを促すことでエンパワメントしていたと考えられる。一方、偏った情報からの育児の一般像の形成や、偏った育児感の形成、対人摩擦からの回避的態度の形成、母親役割代行に伴う自己肯定感の低下など、母親にパワーレスを引き起こす一面もあると考えられる。

本論の調査結果より、育児でのデジタルリソース使用の意味は、母親が置かれた育児エンパワメントの構造により異なることが示唆された。母子保健の専門家は、母親が置かれた育児活動の文脈によって

エンパワメントの課題が異なるが故に、育児での母親のデジタルリソース使用が持つ意味が多様であることを前提として育児支援を展開することが重要である。特に、本論が提示したデジタルリソース使用の4類型を念頭において、家族をアセスメントし、類型により異なる育児エンパワメントの課題を支援することが重要である。